

昔女、物の怪わづらひし所に、物の怪わたしし程に、物の怪、物つき¹につきていふやう、「をのれは、たたりの物の怪にても侍らず。うかれまかり通りつる狐也。塚屋に子どもなど侍るが、物をほしがりつれば、かやうの所には、くひ物散りぼふ物ぞかして、まうできつるなり。しとき²ばらたべてまかりなん」といへば、しときをせさせて、一折敷とらせたれば、すこし食ひて、「あなうまや、あなうまや」といふ。

「此女の、しときほしかりければ、そらものづきてかくいふ」と、にくみあへり³。「紙給はりて、これ包みてまかりて、老女や子共などに食はせん」といひければ、紙を二まい引きちがへて、つつみたれば、大やかなるを腰にはさみたれば、むねにさしあがりてあり。

かくて、「追ひ給へ。まかりなん」と、驗者にいへば、「追へ追へ」といへば、立ちあがりて、たふれふしぬ。しばしばかりありて、やがておきあがりたるに、ふところなるものさらになし。

失せにけるこそふしぎなれ

¹物つき 物の怪（靈魂・キツネなど）の考えていることを、病人・死者などの身代わりになって表現する人。霊媒師・降霊・依り代・いたこ・口寄せ・シャーマンなどともいい、女性が多い。また、三段落目から、僧侶である「驗者」と組んでいるらしいことがわかる。

²しとき お供えの餅

³憎みあったのは誰か。古文常識というか物語常識的に、まじない・祈祷の折には周囲に関係者などの人々がいることが多そうだ。